

3 1 【のっとり】

ぼくの家は自慢ではないけれども、あばら屋でした。
今の人には想像もできないくらい、あばら屋でした。
ぼくの友だちもみんな、あばら屋です。
けれども、友だちの自慢は、家の中に便所があることです。
ぼくのところは、庭にありました。
それでもいちおう、屋根もあるし扉もついている。
夜中に便所に行って扉をあけると、青大将がいたり蝦蟇がいたり鼠が
いたりする。
たまに、狸とか狐とかがいる。
どいつもこいつも蹴飛ばして、用を足す。
その夜も、狸とか狐とかがいそうな予感がしたものです。
でも、いたのは大蛸（おおだこ）でした。
茹（ゆ）でた蛸でもあるまいし、月の光に照らされて、恥ずかしいの
か真っ赤になっている。
ともかく便所は、蛸野郎に完全に占拠（せんきょ）されている。
ぼくが開けた扉を、閉める。
開けても、閉める。
八本の足を、自由自在に動かして閉める。
そのうち、開かないようにしてしまう。
「たこやきにして、くっちまうからな」
くちびるをふるわせて、ぼくはどなりました。
大蛸は返事をしません。
しかたないから便所の扉に向かって、おしっこを飛ばしました。
中で大蛸がもだえる気配がします。
扉が開き、大蛸が便所の穴に逃げてゆくのがみえました。
便所の穴を覗いてみても、もう気配がない。
翌日、懐爺のところに行きました。
「たこやきにしたら、むらじゅうでくえたのにのう」
ぼくは説明してから毒づいたのでした。
まさかとおもったが、蛸野郎も、

「まちがいなくおぼけです」

と、懐爺は即決しました。

「たこのおぼけがでるんは、うみじやろ」

「【のっとり】です。【のっとり】は、もともと狐や狸が化けるんですが、たまに蝮になります。欲が深くなればなるほど大蝮になります」

「うちのべんじょなんか、くれてやってもええがの」

「【のっとり】はひどく凶々しい奴ですから、まずは便所を取ったら、味をしめて、次は納屋（なや）を、それから母屋（おもや）を取ります」

「なかなかやるのう」

ぼくは、してはならないことをしました。

つまり、感心したのです。

「感心している場合ではありません。今度また【のっとり】がでたら、おしっこ飛ばさなければいけませんよ」

「こんどは、うんこもとぼしてやるで」

「それはいけません。【のっとり】がさらに化けて【くそつたれ】になりますよ」

ぼくは呆れました。

「【くそつたれ】は、たこやきでなく、いかやきにしてくれるぞい」

「金ちゃん、よくご存じですね。【くそつたれ】は狸や狐が化けて大鳥賊（おおいか）になるんです」

ぼくはますます呆れました。

懐爺の作り話かもおもわれました。

「わたしの作り話ではありませんよ。鳥賊という漢字の後の文字は賊と書くのです。盗賊の賊です。金ちゃんのうちは取るものがないので、あるいは取ってもつかいものになるものがないので、そういうばあいは、命をとるそうですよ」

「おぼけのはなしは、べんきょうになるのう」

一年分くらい寒気を感じたぼくは、一年分くらい賢くなった気がしました。